

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 9 月 4 日現在

機関番号：34430

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15H03153

研究課題名(和文)「平和」理論の構築 - 「和解」概念に着目した応用倫理的アプローチ

研究課題名(英文) Construction of the Theory of Peace: an Applied-Ethical Approach focusing on Reconciliation

研究代表者

越智 貢(Ochi, Mitsugu)

プール学院大学・教育学部・教授

研究者番号：00152512

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,600,000円

研究成果の概要(和文)：私たちは2014年まで科学研究費補助金に基づき「和解」概念に焦点を当てた平和研究を行ってきた。本研究の目的は、そこで見いだされた「和解」概念に基づき、実践的な「平和」理論を構築することにある。この研究の特徴は、海外の研究者とともに、生命、環境、教育、政治、社会など様々な応用倫理分野を通して「平和」の横断的かつ学際的な研究を行うことにある。本研究の成果として、広島大学応用倫理学研究プロジェクト研究センターの研究誌『PRAXIS』や関連の著作が出版された。

研究成果の概要(英文)：We have been conducting peace studies focusing on the concept of 'reconciliation' based on Grants-in-Aid until 2014. The purpose of this research is to construct a practical "peace" theory based on the concept of 'reconciliation' which was found out there. The feature of this research is to study cross-disciplinary and interdisciplinary on "peace" through a range of applied ethics fields such as life, environment, education, politics and society, with overseas researchers. As a result of this research, the research journal of Hiroshima University Project Research Center for Applied Ethics, "PRAXIS" and related works were published.

研究分野：哲学、哲学・倫理学

キーワード：倫理学原論・各論

1. 研究開始当初の背景

戦争と平和についての哲学的な議論をみる限り、多くは政治的文脈からなされる。「和解 (Versöhnung)」概念に注目した、M.クヴァンテ編、Vermittlung und Versöhnung, Die Aktualität von Hegels Denken für ein zusammenwachsendes Europa, Münster, 2001 もまた国家論のコンテクストで言及される。また、自然との和解に関して言及する、K.マイヤー=アービツヒの Wege zum Frieden mit der Natur. Praktische Naturphilosophie für die Umweltpolitik, München, 1984 があるが、これも環境問題を主題とした論究となる。応用倫理学全般を論じた著作 (たとえば、L.ジープによる Konkrete Ethik. Grundlagen der Natur- und Kulturethik, Suhrkamp, 2004 や越智貢他編『岩波応用倫理学講義』岩波書店、2004/2005、加藤尚武編『応用倫理学事典』丸善、2008) においても、具体的な生活としての「和解」の次元から総合的に「平和」概念を検討する試みはみることができない。このような「和解」という現実的な次元に立脚し、応用倫理学領域の総合的なアプローチによって「平和」を考究する試みは国内外で皆無であり、本研究が嚆矢といえる。

本研究の直接の着想は、応用倫理学プロジェクト研究センターによる平成20年度の「平和研究」に端を発する (越智・山内による日本哲学会シンポジウム「平和・戦争・暴力」の企画運営や、同年7月の例会に招待したフランクフルト大学 M. ルッツ=バツハマン教授との「国際公法と暴力」をめぐる討論等)。ここで繰り広げられた「平和」に関する哲学的な課題を、政治哲学の領域からだけでなく、あらゆる応用倫理学領域 (生命・環境・教育・政治・社会等) を射程に入れた「和解」の視点から再構成することが、本プロジェクトセンターの新たな研究課題として設定された。

2. 研究の目的

本研究の目的は、平和実現のための実践的で総合的な理論モデルを提示することにある。具体的には、ひろく実際生活にかかわる「和解」概念に注目する。ねらいは、「平和」の問題を、より現実的な生活のレベルに引き下げて考えることにある。「和解」とは、異質なものが対峙する様態を示す不和の対概念である。そうした「不和」と「和解」の関係は、私たちの生活のあらゆる場面でみられる。本研究は、「平和」を、現実生活の諸相が織りなす「和解」の問題として再考する試みといえる。研究の手法は、現実場面を見すえた政治倫理、社会倫理・生命倫理・環境倫理・教育倫理の各領域からの哲学のおよび応用倫理的アプローチとなる。「平和 (和解)」のプロセスを応用倫理的な手法で分析・総合することを通して、異質なものに対する排他性・闘

争性と その連鎖 という根源的な問題の解明と克服をめざす。

3. 研究の方法

平成27年度は、生命・教育・環境・政治・社会の領域ごとに 和解概念を軸とした共通する平和理論の構築 に努めた。具体的には、内外の関連文献を渉猟する一方で、各領域における国内外の研究者 (ミュンスター大学の L.ジープ教授 M やクヴァンテ名誉教授等) と交流をはかることによって理論の汎用的な可能性を追求した。平成28年度は、政治・社会・生命・環境・教育の各領域において解明された、「和解 平和」論の総合を目指した。具体的には、それまで各領域で構想された「和解」概念と「平和」構築のパラダイムを、研究者ネットワークや実践フィールドにおいて、実践面での適用可能性を含め協議し、最終的に各領域を架橋する (平和) 理論を総合的に紡ぎだした。最終年度の平成29年は、前期 (4月~9月) に、平成28年度までに各領域で得られた「和解」概念と「平和」構築のパラダイムについて、領域を超えた研究協議を数度開催し、最終的に、領域を包摂する総合的な「平和」理論を導き出した。後期 (10月~3月) には、それらの結果をふまえ、国内外の倫理学者、研究者、実践家を招聘し、市民にも開かれた形でシンポジウムを開催した。これらの研究結果は、国内外での学会発表、公開講座、著作・論文・報告書、ホームページ上の公開、等の形で公表された。

4. 研究成果

平成27-29年度には、「平和理論の構築」という統一課題において、広範かつ多様な分野の研究成果を統合する試みが行われた。

研究成果は各年2回開催される科学研究会で報告された。内容としては、政治領域では山内廣隆「戦争と平和 西晋一郎の哲学について」、石崎嘉彦「デモスの支配と平和 プラトン『国家』第一巻をもとに民主主義を考えるなかから」、杉田孝夫「フィヒテ「閉鎖商業国家論」あるいは平和の政治学」等が、社会領域では、奥田秀巳「和解としての信頼」、桐原隆弘「ドイツの戦後和解と『故郷権』」等が、宗教領域からは、後藤雄太「東洋哲学における自己への配慮と平和 ガンディーとティック・ナット・ハンの思想と実践から」、宇野正三「親鸞研究 悪と救い」等が、生命領域では、後藤弘志「人位」から「人格」へ Person/Personality の訳語確定の意図」等が、環境領域では、池辺寧「災害とともに生きる」等が、教育領域では、伊藤潔志「教育基本法における「教育の宗教的中立性」と和解」等の発表がなされた。これらの領域毎の個人発表については研究誌・著作等に公表された。

最終年度の平成29年度には、ミヒヤエル・クヴァンテ氏による特別講演「原理的に容認不可能？」およびレクチャー「人格の尊厳あ

るいは客観的尊厳 - カントの尊厳概念の多様な次元とその欠陥」アンゼルム・W・ミュラー氏による特別講演 ”Wozu leben wir? Die Konkurrenz zwischen Glück und Tugend” が行われたほか、Hitotsubashi International Conference on Philosophy/Social Philosophy/Applied Ethics および TOYOTA-Stiftung-Projekt zur „Würde alter Menschen“ との共催によるシンポジウムを開催した

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 32 件)

1. 秋山博正「道徳「教科化」による変更の本質」くらしき作陽大学・作陽音楽短期大学『研究紀要 第 49 巻第 2 号』(査読無) 2016 年 12 月、13-31 頁
2. 秋山博正「生徒指導と道徳教育が協働育成すべき「豊かな心」」『研究紀要』第 48 巻第 2 号(査読無) 2016、1-13 頁
3. 秋山博正「意味としての浄土」『研究紀要 第 49 巻第 1 号』(査読無) 2016、1-15 頁
4. 秋山博正「道徳教育を担う教師の課題」『第 86 回大会 発表要旨集』(査読無) 2015、14-15 頁
5. 石崎嘉彦「コンヴェンションナリズムの正義と哲学と詩の抗争について プラトン『国家』第二巻への注解」『政治哲学』第 23 号(査読無) 2017、39-67 頁
6. 石崎嘉彦「プラトンの民主制論と平和」『国家』第一巻をもとに政治哲学のロゴスについて考える」『政治哲学』第 21 号(査読無) 2016、57-76 頁
7. 石田三千雄「哲学者と関心 フッサールの『ロゴス』論文、『改造』論文および「ウィーン講演」をめぐって」『ぷらくしす』(査読無)、第 19 号、2018、43-53 頁
8. 池辺寧「災害とともに生きる」『ぷらくしす』第 19 号(査読有り) 2018 年、19-31 頁
9. 伊藤潔志「ウィトゲンシュタインにおける信仰と実存 キルケゴールとの関係を手がかりに」『イギリス理想主義研究年報』第 13 号(査読無) 2017、15-23 頁
10. 伊藤潔志「ウィトゲンシュタインの宗教理解への視点」『キリスト教論集』第 52 号(査読無) 2017、3-17 頁
11. 伊藤潔志「ウィトゲンシュタインにおける宗教と生活 トルストイとの関係を手がかりに」『キリスト教論集』第 51 号(査読無) 2016、45-71 頁
12. 伊藤潔志「教育基本法における『教育の宗教的中立性』と和解(1) 政教分離をめぐる概念とその限界」『キリスト教論集』第 51 号(査読無) 2015、24-37 頁
13. 上野哲「スポーツにおける誤審をめぐる倫理的考察 審判の判定における不確実性とスポーツの魅力について」『ぷらくしす』第 19 号(査読無) 2018 年 3 月、1-7 頁
14. 衛藤吉則「山本幹夫による宗教としての哲学」『無二の人間の形成 山本空外上人展』、2018 年、24-29 頁
15. 衛藤吉則「近代日本の教育思想史に関する研究視点: 谷本富と西晋一郎に対する歴史評価の再考」『HABITUS』22 巻(査読有) 2018 年、19-35 頁
16. Yoshinori ETO, Shinichiro Paradigm of the Nishi 's Thought: The Paradigm of the Particular as Universal, Hiroshima Interdisciplinary studies in the Humanities, Vol.14, 2016, pp.1-7.
17. Haruko Okano, Theological Ethics in Relation to Japanese Religions -Regarding Moral Responsibility, in : Doing Aisan Theological Ethics in a Cross-Cultural and an Interreligious Context (edit. Yiu Sing Lucas Chan, James F. Keenan, Shaji George Kochutahra, Asian Theological Ethics 2, Bengaluru/India 2016, pp.194-204.
18. Haruko Okano, Das Alter als Stigma oder als Prüfstein für die Reife der Gesellschaft ? Eine Überlegung im japanischen Kontext, in: Stephan Ernst (Hg.), Alter und Altern (Hg., Freiburg: Verlag Herder, 2016, pp.219-231
19. Haruko Okano, Im Anfang war die Frau die Sonne. Die Bedeutung von Elisabeth Gossmann für die Rezeption der feministischen Theologie in Japan, in: Margit Eckholt, Farina Dierker (Hr.), Theologische Frauenforschung in "Bewegter Stabilität" Für Elisabeth Gossmann anlässlich ihrer Ehrenpromotion an der Universität Osnabrück, 2017, pp.43-61
20. 加藤尚武「持続可能な未来と宗教」『東洋学研究』第 56 巻 1 号(通巻 178 号) 2017、245-267 頁
21. 加藤尚武「明治期日本におけるドイツ哲学の選択」『日本の哲学』第 16 号、2015、3-10 頁
22. Yuta Goto, "Caring for Oneself" and "Peace" in Eastern Philosophy : The Consideration from the Practice and the Thought of M.K.Gandhi and Thich Nhat Hanh, Rinrigaku-Kenkyu[Journal of ethical studies] (査読有), vol.25, 2017, pp.61-87
23. 杉田孝夫「平和の政治学としての『閉鎖商業国家論』」『獨協法学』(査読無) 第

- 102号、2017、75-98頁
24. 杉田孝夫「ヴァイツェッカーと戦後ドイツにおける「和解」の政治哲学(3)」『ぷらくしす』第17号(査読無)、2016、67-78頁
 25. 裕智樹「グローバル化と正義の問題」『比較日本文化研究』、第8号、広島大学大学院文学研究科総合人間学講座、2015年、303-315頁
 26. Shunzo Majima, 'Moral (im)permissibility of Terrorism and Suicide Attack', *Annals of the University of Bucharest: Philosophy Series*, 66 (2) (2017), pp. 165-179 (peer-reviewed).
 27. 眞嶋俊造「戦争と道徳的運：「より少ない悪」への指針としての軍事専門職教育を考える」『社会と倫理』第32号、2017、45-56頁
 28. 眞嶋俊造「戦争の悪を考える」『-Synodos』Vol. 217、2017、36-47頁
 29. 村田貴信「カントの真理論 実践哲学との関連における」『山陽小野田市立山口東京理科大学紀要』(査読有)第1号、2018年3月、41-50頁
 30. 村田貴信「プラトン『ソクラテスの弁明』について」『東京理科大学紀要(教養篇)』(査読有)第50号、2018、407-423頁
 31. 村田貴信「教育の可能性と真理への問い プラトン『プロタゴラス』解釈試論(2)」『東京理科大学紀要』(査読有)第49号、2017、55-67頁
 32. 村若修「ケア倫理学に基づく道徳教育の可能性」『鹿児島女子短期大学紀要』第54号(査読なし)平成30年2月、111-117頁
- 〔学会発表〕(計10件)
1. 秋山博正「浄土の 意味 性」広島倫理思想史学会 第88回学術研究発表大会、2016年11月13日、鈴峯女子短期大学
 2. 秋山博正「人間形成におけるデュアル・カルチャー」広島倫理思想史学会 第90回学術研究発表大会、2017年11月12日、広島修道大学
 3. 秋山博正「道徳教育における[公平、公正、正義]と習慣」岡山県道徳教育研究会第123回研究会、2018年2月24日、くらしき作陽大学
 4. 石田三千雄「哲学者と関心 フッサールの『改造』論文と「ウィーン講演」をめぐって」第23回広島大学応用倫理学プロジェクトセンター研究例会、2017年9月23日、広島大学東広島キャンパス
 5. 石田三千雄「フッサールにおける哲学の理念と理性論としての倫理学」京都ヘーゲル読書会冬期例会、2018年1月6日、国際基督教大学東ヶ崎潔記念ダイアログハウス
 6. 伊藤潔志「教育基本法における『教育の

- 宗教的中立性』と和解(1)」第20回広島大学応用倫理学プロジェクト研究センター例会、2016年2月20日、広島大学東広島キャンパス
7. 衛藤吉則「山本空外上人と無二的人間形成」東京大学仏教青年会、2018年3月31日、東京大学仏教青年会館
 8. 後藤雄太「東洋哲学における<自己への配慮>と<平和> - ガンディーとテイク・ナット・ハンの実践と思想から」第20回広島大学応用倫理学プロジェクト研究センター例会、2016年2月20日、広島大学東広島キャンパス
 9. 濱井潤也「人格とアイデンティティ チャールズ・テイラーの人格論とその応用可能性」第32回政治哲学研究会、2016年8月25日、東北学院大学土樋キャンパス5号館
 10. 濱井潤也「チャールズ・テイラーの政治哲学の旅路 アウェイ環境におけるコミュニタリアニズム」京都ヘーゲル読書会平成二十九年度冬期研究会、2018年1月6日、国際基督教大学ダイアログハウス
- 〔図書〕(計7件)
1. 衛藤吉則『西晋一郎の思想 - 広島から「平和・和解」を問う』広島大学出版会、2018、総ページ数207頁
 2. 衛藤吉則『シュタイナー教育思想の再構築 - その学問としての妥当性を問う』ナカニシヤ出版、2018、総ページ数305頁
 3. 衛藤吉則・フィリップ・キャム著『子どもと倫理学 考え、議論する道徳のために』萌書房、2017年、担当ページ34-71頁
 4. ミヒャエル・クヴァンテ著/後藤弘志監訳・桐原隆弘、裕智樹訳『精神の現実性 - ヘーゲル研究』リベルタス出版、2018、総ページ数317頁
 5. 杉田孝夫・中村孝文共編著『おうふう政治ライブラリー 市民社会論』、おうふう、2016、担当ページ391-415頁
 6. 石崎嘉彦・菊池理夫編著『ユートピアの再構築 『ユートピア』出版500年に寄せて』、晃洋書房、2017、総ページ数182頁
 7. アンゼルム・W・ミュラー著/越智貢監訳、後藤弘志編訳『徳は何の役に立つのか?』、晃洋書房、2017年5月、総ページ数248頁
6. 研究組織
- (1)研究代表者
越智貢(OCHI MITSUGU)
プール学院短期大学・教育学部・教授
研究者番号：00152512
- (2)研究分担者
加藤尚武(KATO HISATAKE)
人間総合科学大学・人間科学部・客員教

授
研究者番号：10011305
岡野治子 (OKANO HARUKO)
清泉女子大学・キリスト教文化研究所・研究員
研究者番号：50204003
山内廣隆 (YAMAUCHI TAKAHIRO)
安田女子大学・心理学部・教授
研究者番号：20239841
後藤弘志 (GOTO HIROSHI)
広島大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：90351931
衛藤吉則 (ETO YOSHINORI)
広島大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：60270013
碓智樹 (HAZAMA TOMOKI)
広島大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：30615480
秋山博正 (AKIYAMA HIROMASA)
くらしき作陽大学・子ども教育学部・教授
研究者番号：30221716
池辺寧 (IKEBE YASUSHI)
奈良県立医科大学・医学部・准教授
研究者番号：00290437
石崎嘉彦 (ISHIZAKI YOSHIHIKO)
摂南大学・外国語学部・名誉教授
研究者番号：80232289
石田三千雄 (ISHIDA MICHIO)
徳島大学・総合科学部・名誉教授
研究者番号：90127605
伊藤潔志 (ITO KIYOSHI)
桃山学院大学・経営学部・准教授
研究者番号：40511788
上野哲 (UENO TETSU)
小山工業高等専門学校・一般科・准教授
研究者番号：90580845
上村崇 (UEMURA TAKASHI)
福山平成大学・健康スポーツ科学科・教授
研究者番号：50712361
後藤雄太 (GOTO YUTA)
広島大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：90610478
手代木陽 (TESHIROGI YO)
神戸市立高専・一般科・教授
研究者番号：80212059
眞嶋俊造 (MAJIMA SYUNZOU)
広島大学・大学院総合科学研究科・准教授
研究者番号：50447059
村田貴信 (MURATA TAKANOBU)
山口東京理科大学・工学部・教授
研究者番号：70200293
桐原隆弘 (KIRIHARA TAKAHIRO)
下関市立大学・経済学部・教授
研究者番号：70573450
杉田孝夫 (SUGITA TAKAO)
お茶の水女子大学・基幹研究院・名誉教授
研究者番号：40206412
濱井潤也 (HAMAI JUNYA)
新居浜工業高等専門学校・一般教養科・講

師
研究者番号：10612369
村若修 (MURAWAKA OSAMU)
鹿児島女子短期大学・児童教育学科・教授
研究者番号：30212260

(3)連携研究者 無